

横浜市立大学学術情報センター

貴重書
月替わり展覧会リーフレット
(166)

2025年7月の作品は

きそうにちろく
『羈窓日録』

— 江戸幕末の陰の立役者の日録から —

展示テーマ

～日録からみる藤沢次謙～

今回紹介する『羈窓日録』は、江戸幕末から明治初期にかけて幕府の陰の立役者として活躍した藤沢次謙（以下、次謙と記す）という人物が記録したものである。『羈窓日録』に記録されている内容は主に地名と人名であり、また画家が描いたのではないかと疑うほど美しい墨絵がその内容とともに描かれている。現代では美しい景色をスマートフォンで簡単に写真として残すことができるが、そのような技術がなかった時代には絵として記録する必要があった。だが、絵を描くこともかなり時間が必要であり、誰もが次謙ほど上手に描くことができるわけではない。

では、なぜ次謙はただの日録にすればよいところを、墨絵をじっくりと描いたものにしたのか、人の名前を詳細に書いたのか。そこには何か次謙の思いや人柄などが表れているのではないだろうかと考えた。他人に見せることを前提としていない日録だからこそ、読み取れる事柄や内容から次謙の人柄などを想像しながら作品を見てほしいと思う。



『羈窓日録』（1冊）

江戸時代、文久4（1864）年

作者：藤沢次謙（1835～1881）

縦 15 cm × 横 21.5 cm

作者の次謙が品川を出発し、京都に入る道中で記録した道中絵日記である。京都での活動の様子を記すとともに、帰路の様子も記している。

そもそも、次謙とはどのような人物か。次謙は江戸幕末から明治初期にかけて、幕臣や陸軍奉行として活躍した。特に、『羈窓日録』が記録されていた時期（1864年1月13日～6月14日）には、多くの事件が起こっている。入京してから將軍参内へのお供、江戸築地の軍艦操練所の焼失、筑波天狗党の乱、池田屋騒動など、江戸に帰るまで様々な問題が勃発した。そんな状況の中でも自分の兵を責任をもって率い、役割を全うした優秀な人物である。また、今回『羈窓日録』を紹介しようと思った理由の一つである、墨絵の美しさも次謙の特徴である。次謙の描く絵は非常に繊細で上手であり、思わずずっと見続けてしまうような魅力がある。この書は日録であるため、様々な地名や人名を次謙が自身のために記録したものである。何のために記録を付けたのか、記録から次謙の性格や人物像を考察してみようと思う。

展示のみどころ

～日録から見る次謙の人柄～

日記とは、今も昔も自分が把握しておきたいことや考えた事などを紙に残しておきたいという気持ちから記録するものであるため、そもそも人に見せるという前提で書く人はいないだろう。だからこそ、日記には書いた人の本心がその人自身の言葉でつづられており、その人の人柄や性格が表れると思う。そこで偶然にも横浜市立大学に保存されていた『羈窓日録』から、記録してあったものの特徴を見つけ、次謙の人物像を考察していこうと思う。

『羈窓日録』に記録されているのは、主に地名と人名である。品川から京都に入るまで、ほぼ東海道五十三次の順番で進んでいることから、東海道を進みながら入京したことが分かり、その節々に各地で有名な山や川の絵が描かれている。どの絵も墨だけで描いたとは思えないほど美しいものである。

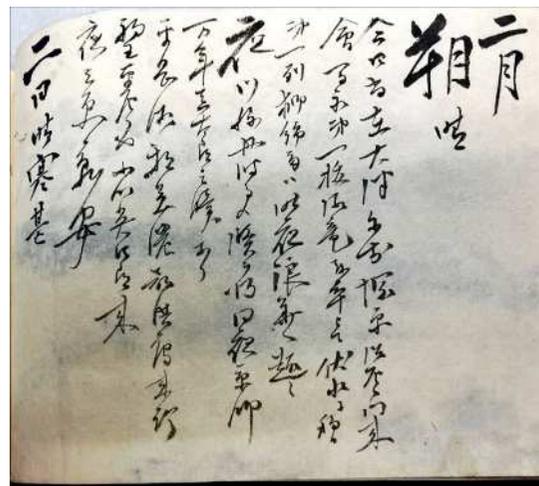


左図は次謙の墨絵の一部で、比叡山と比良山の絵である。現代、私たちは旅行や出張などで訪れたことのない場所に訪れた時や、美しい景色を見た時にはスマートフォンで写真を撮って簡単に記録に残すことができる。しかし、昔はそんな方法がなく、紙に記録する方法だけで

あった。そのため、記憶に残したい景色や情景を絵に描くことは、当時は普通の方法であったかもしれない。だが、ここまで繊細に描いているというのは、絵を描くことがかなり好きであった、あるいは多忙な毎日からの現実逃避であったのではないかと考える。

次謙の『羈窓日録』による品川～京都までの道順

品川→川崎→保土ヶ谷→藤沢→大磯→小田原→箱根→三島→蒲原→興津→府中→島田→日坂→掛川→見附(現在の磐田)→浜松→新居→吉田→赤阪→岡崎→池鯉鮒→熱田→桑名→四日市→亀山→坂之下→水口→大津→京都



次に注目したい事柄は、『羈窓日録』に多くの人の名前が記録されていることである。左図の記録は京都に入った2月1日のものである。ここに登場する人物は、塚本浩左衛門、川勝丹波守、万年真太郎、美濃部洪庵、福王平左衛門、小川英四朗の6名である。また、翌日の2月2日には新

たに7名の名前を、2月3日には18名もの名前を記録している。会った人の名前を詳細に記録しているということは、次謙がまめで人の顔と名前をきちんと覚えようとする、リーダーに向いている性格であることを表しているのではないかと考える。これほどしっかりと自分のために記録を残すことは几帳面さの表れであると思う。以上のことから、『羈窓日録』はただの記録ではなく、書いた人の人柄を読み取ることができる、おもしろい資料であると言えるだろう。

参考文献

・屋根のない博物館ホームページ、幕府最後の閣僚・藤沢志摩守次謙
<https://yanenonaihakubutukan.net/4/fujisawasimanokami.html>
(最終閲覧 2024年11月11日)

あとがき ～貴重資料に触れて～

今回のような機会がなければ、貴重書に触れるということは人生でなかったと思うので、とても貴重な体験ができたと感じている。ずっと昔の時代の書物が今もほとんどダメージがない状態で保存されていることの凄さを実感し、こういった歴史あるモノは大切に私たちが保存して守っていかねばならないと思った。

※コレクションの閲覧は、作品保護のため、展示品を除き申請が必要です。また利用は学術研究目的に限らせていただいております。
※過去の展示はオンラインでも公開中です！
※第167回展示は令和7年8月上旬からを予定しています。



令和7年7月1日発行
令和6年度 日本文化論B受講生 編集
236-0027 横浜市金沢区瀬戸 22-2
横浜市立大学 学術情報センター